

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 19 日現在

機関番号：34504

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02062

研究課題名(和文) ミクロネシア女性の身体をめぐる生と姓

研究課題名(英文) Micronesian women's bodies, lives and gender roles

研究代表者

李 恩子 (LEE, Eun Ja)

関西学院大学・国際学部・教授

研究者番号：50580586

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、旧南洋群島研究で看過されてきたミクロネシア女性たちの身体をめぐる記憶、経験に焦点を当て、日本の委任統治が彼女たちの生に何をもたらしたのかという問いを設定し、そのレガシーを明らかにすることであった。彼女たちの身体、生、そして性に大きな影響を与えた事柄に日本人男性との間に生まれたいわゆる「混血子孫」のことがある。しかし、戦後の帰還プロセスで帰還者の対象からはずされていた。

本研究の主要な研究方法である現地での当該者へのインタビューをかなり収集することができ、論考を執筆中である。また、多方面の研究者と論集刊行に向けたネットワークもでき、そのプロジェクトも推進中である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は、旧南洋群島に関連するこれまでの研究(国際政治、委任統治時代の教育、現地語への日本語の影響など)で看過されてきた女性たちの歴史的な位置、役割に光を当てようとしたことである。本研究が試みた女性の身体と性に関する日本人と現地女性との間に生まれたいわゆる「混血児子孫」をめぐる諸様相を記述、分析しようとしたことは未踏の研究であり、そのこと自体に意味があると考えられる。「混血児子孫」たちへのインタビューからその経験、記憶、実態を収集できたことの意義は大きい。今後、それらを論文にしていこうとすることでこの地域研究の幅を広めることへの貢献につながると考える。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to reconsider the legacy of Japan's control during its mandate and its effects on Micronesian women's lives. An aspect of the research will be the fate of the so-called mixed-race children born of connections between island women and Japanese men before the war. With that in mind, extensive interviews have been conducted with 'mixed-race' descendants of Micronesian women. The research has also considered why many Micronesian women and their children did not go to Japan with their Japanese partners after the war. I was able to conduct a number of interviews in which I asked this question and am currently writing an article based upon the results. Another achievement was to form a network of researchers in the same area of study and to publish a book that contains their findings.

研究分野：ジェンダー

キーワード：ミクロネシア 旧南洋群島 ジェンダー役割 身体 ポストコロニアルの問い 「混血児」

1. 研究開始当初の背景

近年、旧南洋群島に関する研究は増えつつあるが、女性、ジェンダーに関するものは、母系制についていくつかある程度で極めて少ないのが実情であった。そのため、研究当初は女性の身体、生、性に関連する全般的な研究の射程を考えていた。また、女性に関する先行文献の不在から、文献での調査は困難であった。加えて、オーラルヒストリーの文化的背景を持つ地域であるため、フィールドリサーチによるインタビューを通して、本研究の問題設定、ミクロネシア女性の身体をめぐる生と性の現状を日本の委任統治、そして太平洋戦争の関与という歴史的、政治的枠組みの中で考察するというものであった。

2. 研究の目的

歴史的に日本と深い関係のある旧南洋群島における女性たちの身体、生、性に起きた問題、あるいは、女性たちの経験に刻まれている今日の問題を再検討し、その語りと記憶から日本とミクロネシアの過去、現在をジェンダーの視点から分析・検証し、これまで光が当てられてこなかった歴史的経験を再構築しようとするものである。つまり、これまで看過されてきた旧南洋群島での女性の位置やジェンダー役割などを調べ、明らかにしようとするのが研究目的であった。更には言えば、彼女たちの身体をめぐる様相や状況を調べる作業は、委任統治の形態がたとえ領土支配が含まれていないものであったとしても、植民地主義的支配の形態としてみる事ができる。それゆえ、一つのポストコロニアルな視点からの問いでもあり、その答えを探り出す、ということが目的であった。

3. 研究の方法

本研究の方法は、文献研究及びアーカイブズリサーチ、そして、本研究の主要方法である現ミクロネシア地域及び米国本土でのフィールドリサーチであった。具体的には、研究当初のフィールドリサーチから見えてきた、日本人とミクロネシアの人々の間に生まれたいわゆる「混血児」をめぐる問題を解明するために、「混血」の子孫たちを探し、インタビューを行うことであった。まず、教育機関、宗教団体、個人からの紹介を得て、その子孫たちを探し歩き、7地域(パラオ、サイパン、チューク、ポナペイ、ハワイ、シアトル、オレゴン)を中心として約20人(混血児でない人からのインタビューの数は含まない)の人たちからインタビューを行なった。

面談設定のためには、事前に何十回というメールのやりとりを通して、こちらの意図、目的などを丁寧に説明しながら準備した。最終年度に調査予定していたマーシャル島への数カ月わたる準備は、新型コロナ感染症拡大に伴う入国制限のため、出発直前に日本からの訪問者への入国禁止令が発動され、断念せざるを得なくなった。しかし、メールのやり取りで現地の人と築いた一種の信頼関係は次回に有用できると思っている。

インタビューは、英語だけの場合と現地語から英語への通訳を介する場合の方法を取った。面談は同じような背景を持つ人たちへの同時インタビューの場合もあれば、個別のケースで一回だけの場合、あるいは回数を重ねたケースもあった。時間の調整がうまくつけられなかったケースは、電話やメールでもインタビューを行なった。これに加えて、日米の戦後処理に関する公文書からミクロネシア女性に関連するものを探し出す資料収集も実施した。

研究対象地域(国々)である旧南洋群島は太平洋上広範囲に散在していることやそれぞれの国の文化、言語が違い、対象者を探すことが容易ではなかった。そのため、フィールドリサー

チの不十分な側面を補うため、また実施時により効果的な調査をするために、米国のミクロネシア地域研究者との情報交換、及び学术交流をした。その結果、交流した研究者たちには、本研究対象地域でのフィールドリサーチを複数にわたって継続していること、実際に滞在した経験などからの知識や情報を持っていること、そして、現地でのネットワークの人的リソースの紹介など、本研究を遂行するうえで大変貴重なものとなった。そのような関係性ができたことは、今後の研究継続にとっても意味がある。

4. 研究成果

本研究の主要研究方法であるフィールドリサーチを繰り返す中で、本研究テーマであるミクロネシア女性の身体をめぐる生と性に関連して、明らかになってきた歴史的事実をまず一つの成果として、以下に挙げておきたい。

戦後の米国による信託統治を経て、現在の自由連合盟約という支配下で軍事的、経済的支配のみならず、文化的支配は、住民たちの健康や環境問題にまで影響を及ぼしている。特に、食文化の影響による保健医療に関する事柄が、現地での大きな問題になっている。米国式への食文化の変更、たとえば、主要食がタロ芋から小麦粉や米へ、缶詰製品やインスタントフード、脂肪だけの七面鳥の尻尾など、現地の人たちの嗜好は大きく変わった。つまり、海の宝庫に恵まれながら、鮮魚から肉食へというジャンクフードへの変化は、言うまでもなく、現地の女性たちだけに弊害を与えているのではない。

肥満、糖尿病、高血圧など住民全般の中に成人病を持つ人たちが急速に増えている。この状況は、この地域に対する米国の支配の影響が軍事的、経済的だけではないということである。つまり、「文化帝国主義」の側面からも見ていくことが、今後の緊要な課題研究であることが認識できた。

さらに、女性に関しては、乳がん患者数の絶対数そのものが低いと注目されにくいのだが、その人口比からすると世界4位という報告がなされているほど罹患率が高い。このような実態に関連する領域の日本語での研究はもちろん、英語によるものも乏しいことがわかった。

また、現地では医療施設が極めて不十分で、適切な治療が受けられない。そこで、人々は自由連合盟約の「恩恵」とされる No Visa で米国に入学し合法的に就業も可能であるため、文化的にも地理的にも近いハワイや米国西海岸に、移動して暮らす人口が近年急増している。しかし、そのような移動実態に関する研究は、前述のハワイ大学所属の研究者が、ハワイに住むミクロネシアンについての研究をすでにしているものの、まだまだ先行文献が少ない上、移民学という領域のなかでもあまり取り上げられておらず、研究が進んでいないことがわかった。

本研究のもう一つの成果として挙げられるのが、日本人と現地の人々との間に生まれた、いわゆる「混血児」についての諸様相に関する先行研究の不在の発見である。「混血児」についての先行研究として、パラオにある「混血児」たちのグループ「サクラ会」に関する論文があるものの、ほとんど手つかずの領域である。

「混血児」とはつまり、委任統治時代の日本人役人や労働者あるいは、太平洋戦争時代に入島した日本人軍人との間に生まれた子孫である。この「混血児」をめぐる事柄は、解明しなければならない多くの問題を内包しており、日本の統治がこの地に何をもちたらし、何を残したのかをジェンダー視点から考察、検証することは、文化的支配の遺制を考察する上で、大変重要な研究領域であると認識するに至った。

現地の当該者たちは、当時の祖父の身分、来島の原因や事情など、知らされていないケース

が大半である。もちろん、伝説的人物のように語られる元巨人軍の相沢選手についての先行研究はあるが、例外的と言える程少ない。又、そこで語られているものは、相沢選手本人についての記述であり、チューク人である母親に関する記述は限られている。

本研究のフィールドリサーチ過程で、相沢選手の甥にインタビューすることができた。その中で相沢が、晩年生まれ育ったチュークに戻り、埋葬されることを願っていたということがわかった。このような事例は、本研究の調査からすると極めて稀なケースである。そして、このケースも相沢の母に関しての情報は記憶していないというものであった。

また、他の興味深い点としてあげられるのが、相沢選手の甥もそうだったが、多くの人々はその祖父と祖母の出会いなどの事情を知らないまま、その姓を現在の自分の氏あるいは名として用い継承している。日本名の継承はその社会でのステータスとも関係している。代表的な例として、漫画や小説『冒険ダン吉』のモデルになった高知県出身の森抗弁の子孫たち、現地での俗称でいうならば、「モリファミリー」の親族たちは1000人以上で、ミクロネシア連邦の大統領に選出されるなど、チューク州社会の主要なポジションについている。

他にも、日本名が社会的地位に繋がっていることを示す例として、パラオ現地で遭遇した議員出馬の選挙用の立候補のポスターに、日本の氏のものが多くみられた。その他、ハワイ大学図書館 Hawaiian & Pacific Collection に所蔵されている歴代政治家が載っている名簿からもその実態は把握することができた。そこから得たヒントは、次回の調査で現地の州議会なども訪ねる必要性である。

本研究期間では、「混血子孫」の統計を探すことはできなかった。統計が存在しているかどうか疑問だが、離散した家族は相当数が想定される。特に戦後の混乱時に離散したままのケースが多いと推定している。しかしながら、戦後70年を経ても親子関係の確認作業などは国家間でなされなかった。ボランティア団体により着手されているという話も聞けなかった。ただ、特定の地域間で個人、団体の交流は継続されているが、離散家族再会に重みがあるものではないようだ。ただ、個人的に家族の再会を果たしているケースがあることは、インタビューを通して確認できた。そして、再会を助け、その家族に関する数少ない研究もできた。一方で、関係が断絶されているケースも多いことが明らかになった。史・資料や国家間の動きがない原因を究明することも今後の大事な学術的問いになりうる。

ミクロネシア人の日本人との「混血児」に関する研究は、未踏に等しい。それに比べ、日本人と沖縄人の引き揚げに関する研究、とりわけ沖縄からの移民労働者が多かったこともあり、沖縄と旧南洋群島との関係からの帰還者・引き揚げ研究は多くある。しかし、この「置き去り」ともいえる「混血児」、母や子供、現在は孫、たちとの関係などについての研究は皆無に等しい。

上記のように、本研究で調査対象とした問題は先行研究や文献がほとんどない、いわば未踏な領域であるということがわかった。しかし、次の点は今後の課題として挙げるができる。

戦前・戦後のミクロネシアから日本への引き揚げ推進時期のプロセスで、現地の女性、そして、その間に生まれた子供の引き揚げをめぐる処遇に関する政策が立てられたという形跡などは文献調査からは確認できなかった。つまり、国家から、政策から放置された、その存在そのものも無視されたままの対象だったと想定できる。それゆえ、彼女たちに関する公文書を探すこと自体が不毛な作業であるのかもしれないが、現段階での研究結果として断定することは避けたい。今後、時間をかけて更なる調査研究をすることによって実証的歴史の再構築の可能性は残っていると考える。たとえば、軍人の日記、手記、軍の報告書、更なる家族へのインタビュー、などである。

本研究期間中に現地でミクロネシア在住の研究者と米国の研究者を招いてワークショップを

する予定であったが、現地受け入れ側の責任担当者の健康上の都合により実現できなかった。しかし、この企画は助成金を得ることができれば、この間の調査を通して築いた人間ネットワークを駆使して十分に実現可能である。

現地でのワークショップは実現できなかったが、過去にチューク短期大学の学長を本研究代表者の所属校である関西学院大学に招いて、学生と教員参加の公開講演会を開催することができた。学生はグアム以南の太平洋諸島について、まったくといってよいほど日本との歴史的関係の事実を知らず、現地の人を招いて直接話を聞く機会は、国際的視野を広げるために有効であっただけではなく、近代史の一部を知る上で大きなインパクトを与えることができたと考える。

今後の研究を続行するために有用なことをもう一点成果として挙げておきたい。ハワイ大学南洋コレクションへのアクセスの容易さ（滞在期間中無料でオンラインサービスを受けることができる、レファレンス関係者が非常に協力的である等）がわかり継続してのResearchができる環境が整えられた。またハワイやシアトルなどマイクロネシアの人々の移動先でのインタビューを通して違う問題群が見えてきた。たとえば、シアトルで多くの若い女性が働くチキン加工工場、違法滞在でもないのに、厳しい監視下で低賃金で雇用されていることや、生活のため複数の職場で働いている人たちの実情もわかった。マイクロネシア女性はその歴史に翻弄されて、辿りついた移動先でのさまざまな問題と、その生活実態に関するResearchの入り口も見えてきた。また、「混血児」に関しては初回にマイクロネシアのチュークで出会い、二回目は米国オレゴンで二日に亘ってインタビューをした人から、はじめの時には聞けなかつたいくつかの事実を聞くことができた。たとえば、この方の母親だけではなく、現地の女性は「正式」妻ではないということである。これが「置き去り」の原因の一つであるということがわかった。ただ、亡くなった母親が自分の夫に対してどのように思っていたのかという、感情にかかわる繊細なことなどは聞きだせなかった。この時、面談者がインタビューの最後に語った「もし、父親と一緒に日本に行っていれば自分の人生はどうなっていただろう」という言葉とその表情から、歴史がいかにも人間の運命を翻弄するかを痛感し、その側面からも本研究のプロジェクトをさらに深める必要と意義があるだろう。

現在これまでのインタビューを含む調査や知見から、二つの論文を準備執筆中である。一つは他の研究者にすでに呼び掛けており、論集を編集し今年度中に刊行予定をしている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 李 恩子	4. 巻 Vol.6 No.1
2. 論文標題 旧委任統治領パラオ共和国を訪ねて	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 国際学研究	6. 最初と最後の頁 65-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 李 恩子
2. 発表標題 How Christianity has affected the lives of Micronesian Women
3. 学会等名 アメリカ宗教学会（American Academy Of Religion）ワークショップ
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考